

エジプト先王朝期の彩文土器を考える

—エル＝アムラ遺跡を中心に—

関廣尚世

The Study of Decorated Pottery in Predynastic Egypt: A Case Study at el-Amrah

Naoyo SEKIHIRO

彩文土器はそれに描かれる文様が画一的で、限られた時期に出現することから、ナカダII期の宗教的・象徴的な奢侈品として評価されてきた。一連の研究史の中には、個々の文様の意味や文様にグループを認め、その意味について考えたものが多いが、墓塚からの出土状況や被葬者との関係、共伴関係などについて深く追求したものは少ないといえる。

本稿ではエル＝アムラ遺跡出土の資料を中心に、彩文土器を取り巻くこれらの属性も含めて実証主義的・多角的な考察を行った。この結果、彩文土器が副葬されるか否かということが、単純に貧富の差を示さないということを提示することになった。また、従来指摘されていた性別と副葬品の関係についても一定の傾向を示したといえる。

そしてこのことは、先王朝期の人々の彩文土器に対する認知システムが、我々が認識しているよりも遥かに複雑であったということを示唆していると考えられる。宗教的・象徴的な奢侈品として捉えられてきた彩文土器がそのような複雑な出土傾向を示すことこそ、重要である。

キーワード：彩文土器、認知システム、出土状況、共伴関係、性別

Decorated pottery was estimated to be religious and symbolic luxury goods in Naqada II because of its stylistic pattern and limited use. There is little research concerning the excavational context, assemblages of archaeological artifacts and sex in serial work although many studies related to the meaning of each decoration type or group of decorations has already been accomplished.

In this paper decorated pottery excavated at el-Amrah was treated empirically. It is supposed that there is little possibility to show a disparity in wealth whether someone was buried with Decorated pottery or not. It is also supposed that the connection between sex and burial goods without decorated pottery had some tendency as many researchers had already pointed out.

These results show that the cognitive system involved in the decorated ware was more complicated than we expected in the Predynastic period. It is important that the movement of decorated pottery which is accepted as religious and symbolic luxury goods were similarly complex.

Key-words: decorated pottery, cognitive system, excavational context, assemblage, sex

はじめに

エジプト先王朝期のいわゆる彩文土器は、19世紀末にその存在が認識されてからこれまで、宗教的・象徴的な奢侈品として、裕福な階層の人々の副葬品と考えられてきた(Baines 1989)。しかし、不可解な文様が描かれているからといって、単純に宗教や儀礼に結びつけるべきかどうかは疑問の残るところである¹⁾。

筆者は前稿において、彩文土器はその文様のみならず、

その出土状態との関係等も重要であると指摘した(関廣2003:74)。高宮いづみも、上エジプト中部から南部までの遺跡を対象にこうした観点から分析を行っている(高宮2003a)。高宮はこの中で、エル＝アムラ遺跡の報告例は富裕者の埋葬施設と想定している。先述の通り、彩文土器はこれまで奢侈品として考えられてきた遺物であるだけに的を射ているようにも見えるが、本稿ではあえて、彩文土器が富裕者層の埋葬施設においてどのような出土傾向を示す

のかについて検討を加えてみたい。

一遺跡での分析となり、対象とする資料数が少ない観は否めないが、彩文土器の詳細な出土傾向を検討することで、先王朝期のエジプトにおける彩文土器の役割をより具体的に復元できると考えた。このような見地で、以下論を進めてみたい。

エル＝アムラ遺跡について

1. 立地と周辺環境

エル＝アムラ遺跡は、北緯26度11分、東経31度55分、アビドス遺跡から東南方向へ約8kmのナイル川西岸の河岸段丘東端に位置する。また、同遺跡はW. M. F. ピートリー (Petrie) による時期区分：アムラ期のタイプサイトとなった遺跡で、後にG. ブラントン (Brunton) によって命名されたバダリ期と、ゲルゼ期の間にあたる。

遺跡周辺には、ナイル川東岸にナガ・エド＝デル (Naga ed-Deir) 遺跡とメシェイク (Mesheikh) 遺跡がある。また、ナイル河西岸には、エル＝マハスナ (el-Mahasana) 遺跡、 Beit Allam) 遺跡、ナグ・エル＝アルワナ (Nag el-Alawana) 遺跡、エス＝サルマニ (es-Salmani) 遺跡、エン＝ナワヒド (en-Nawahid) 遺跡、アビドス (Abydos) 遺跡、エル＝バライト (el-Baraghit) 遺跡といった先王朝期の遺跡が点在する (図1)。

ナイル川の東西両岸に広がるこれらの遺跡群は、初期王朝期にはアビドス遺跡へ王墓が形成されたことや、後オシリス信仰の中心地として栄えたことから、アビドス遺跡が中心的な役割をはたした、一つの地域的まとまりが考えられている。

また、以下の2点からも、アビドス遺跡一帯が一つの地域的まとまりであるという点が指摘されており、その中の一遺跡として、エル＝アムラ遺跡が位置づけられている。

まず、巨視的なセトルメント研究によって、これらの遺跡群はアビドス遺跡 (拠点的遺跡) を中心に、エル＝アムラ遺跡等 (複数の衛星的遺跡) から構成される文化圏 (地域) を形成していると考えられている (Patch 1991)。しかし、同地域にあるのはほぼ墓地遺跡で、居住地遺構 (セトルメント) が良好に残存するのはアビドス遺跡とエル＝マハスナ遺跡である。D. C. パッチ (Patch) によると、王朝時代には第8ノモスの首都となるティニス遺跡に対し、ナガ・エド＝デル遺跡という墓群が伴うという (Patch 1991: 46)。このように、集落の周辺に墓地が形成されることから、これらの被葬者が近隣居住地の住人であったと仮定すると、墓群の規模から居住地の規模を復元するのは可能であるとしている (Patch 1991: 42-43)。したがって、エル＝アムラ遺跡は墓地遺跡であるが、その存在はこの近

隣にエル＝アムラ遺跡被葬者の居住地域があったことを意味している。

次に、ナカダI期 (アムラ期: SD30-38) に盛行した白色交線土器²⁾においても、アビドス地域一帯が一つの地域的まとまりとして捉えられている (Finkenstaedt 1980)。これはナカダ遺跡やアルマント遺跡から構成されるナカダ地域³⁾ 出土の白色交線土器との比較によるものである。R. F. フィンケンスタデト (Finkenstaedt) は白色交線土器の文様から上エジプトを3地域に大別した。すなわち、①エル＝アムラ周辺地域、②南部西岸地域、③南部東岸地域である。

これらの3地域を代表する遺跡は、①がアビドス遺跡、②がナカダ遺跡、③がバダリ遺跡であることから、各遺跡の名称を取り便宜的にそれぞれ、①をアビドス地域、②をナカダ地域、③をバダリ地域と呼ぶことにする。

またフィンケンスタデトは、①アビドス地域と②ナカダ地域を中心に論じていることから本稿でもそれに従うことにするが、同氏はこの2地域から出土した白色交線土器の文様様式を、①のアビドス地域は宗教的で呪術的なモチーフが用いられるのに対し (図2-5～7)⁴⁾、②のナカダ地域は平和で牧歌的なモチーフが選ばれる⁵⁾ (図2-1～4) と論じている。そして、施文はアビドス地域の白色交線土器よりもナカダ地域のもののほうが丁寧で、明瞭に描かれるとする (Finkenstaedt 1981)。白色交線土器の文様から、ナカダI期にはアビドス地域という小地域が確立していたことになる。

このように巨視的セトルメント研究においても、ナカダI期に盛行した白色交線土器の文様様式においても、アビドス地域が一つの地域的まとまりであることは否めない。では、次項から、このアビドス地域の一墓地遺跡であったエル＝アムラ遺跡について詳述してみたい。

2. 遺跡の概要

エル＝アムラ遺跡は、1901年にD. ランドール・マクイーパー (Randall-MacIver) とJ. C. メイス (Mace) らによって調査されている。これにより、先王朝期から初期王朝期にかけての墓壙が1000基以上確認され、a墓群とb墓群から構成されていることが判明した。そして1000基以上の墓壙のうち108基が報告されており⁶⁾ (Randall-MacIver and Mace 1902: 15-24)、その構造から1～9類に大別されている。このうち最も多くの割合を占めるのは2a類と3類である。前者は平面が長円形を呈し、150～180cmの深さをもつが、墓標等の上部施設はない (図3-b144号墓)。また、後者は地盤をくり抜いて造られ、ニッチをもつものである (図3-a118号墓)。ニッチには、遺体が葬られるスペースと、副葬品を入れるスペースを分断するように障壁が設けられる例 (b135号墓: Randall-

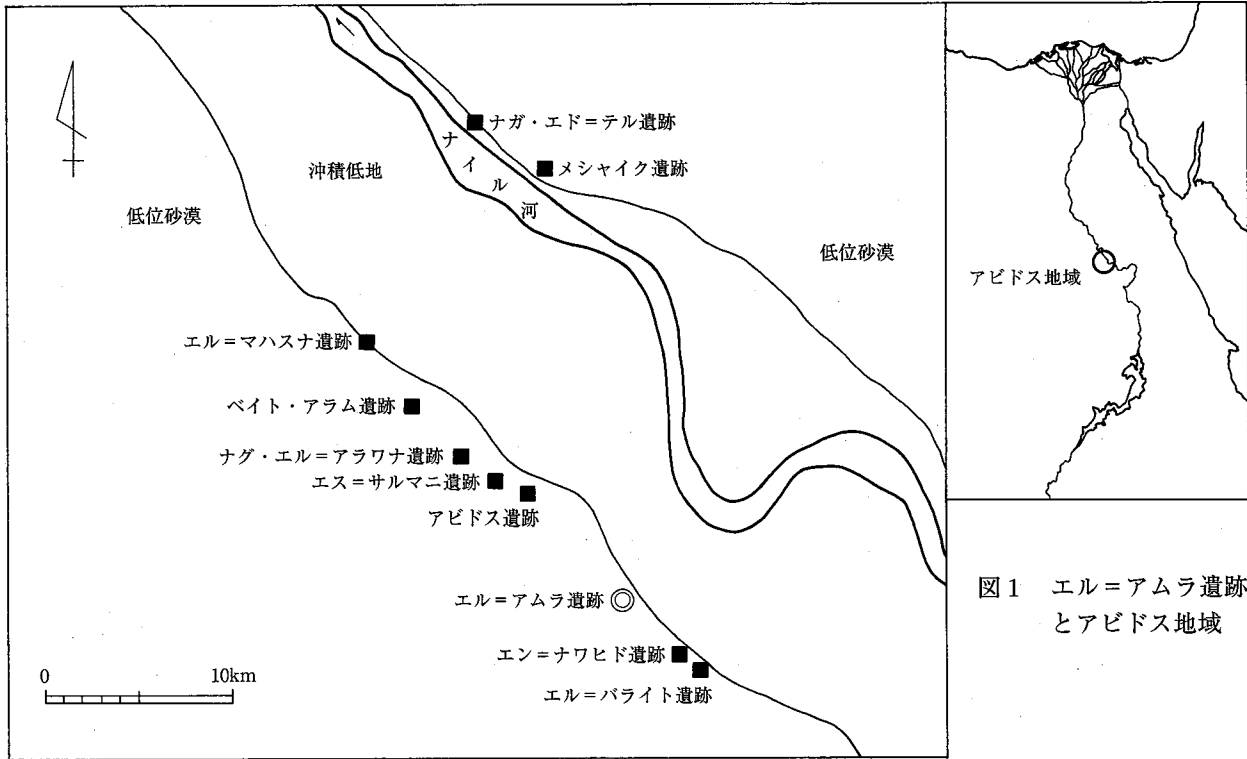


図1 エル＝アムラ遺跡とアビドス地域

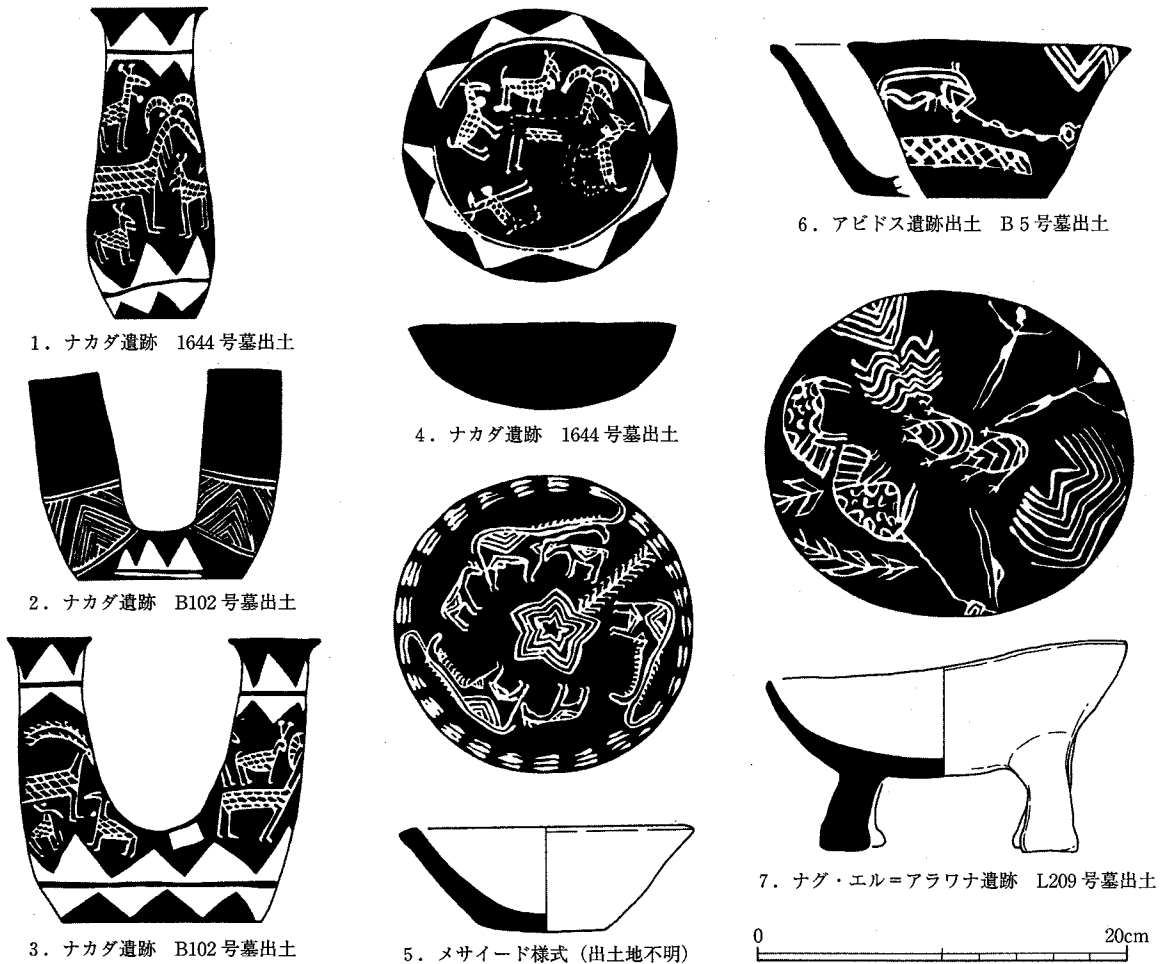
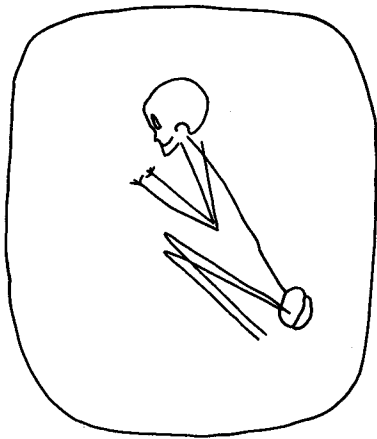
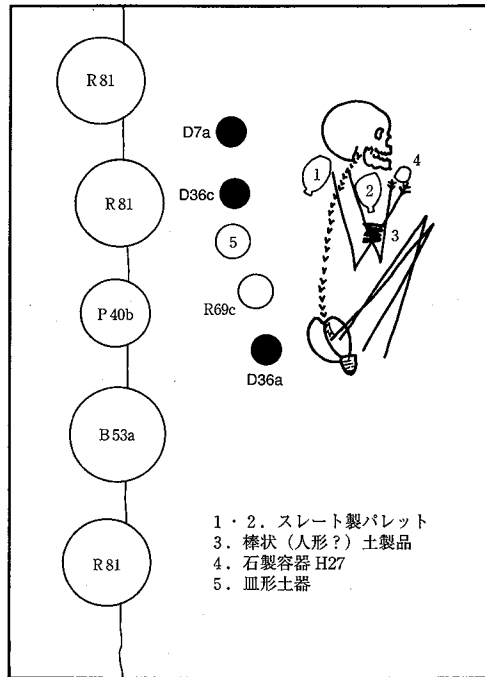


図2 アビドス地域とナカダ地域の白色交線土器

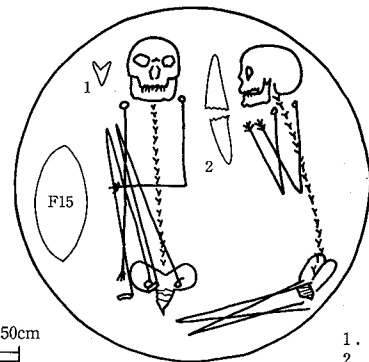
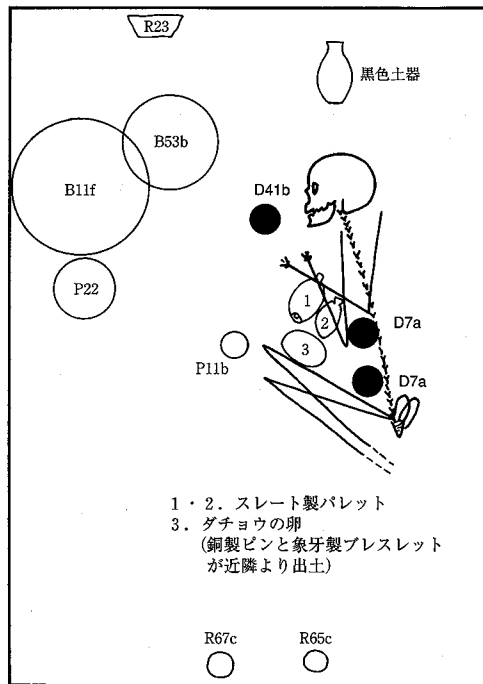
b144号墓 (成人男性)



a118号墓 (若年女性)

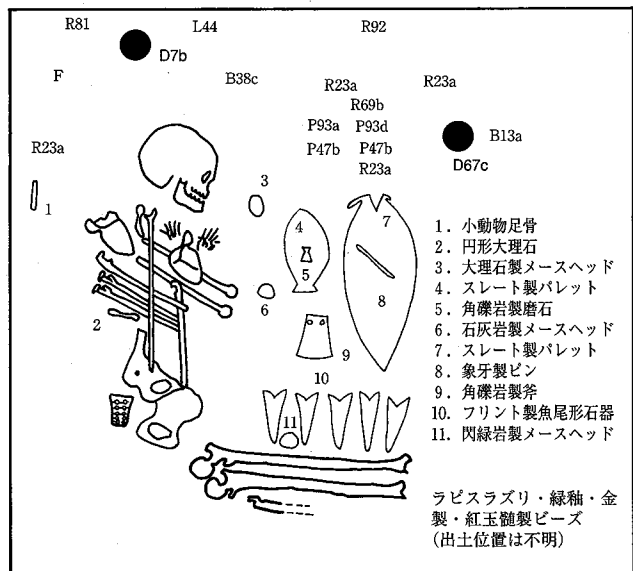


a139号墓 (成人女性)



1. フリント製魚尾形石器
2. スレート製ナイフ (半裁)

a96号墓 (成人男性)



b132号墓 (左:幼児,中央:成人男性,右:幼児)

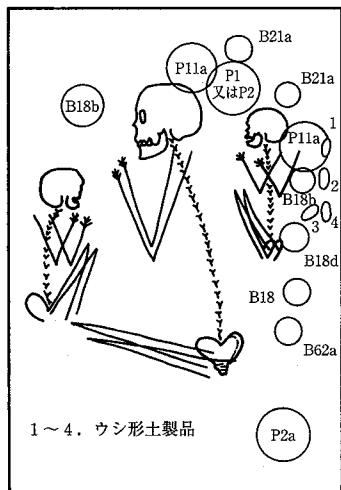


図3 エル=アムラ遺跡の埋葬形態と彩文土器出土状況

MacIver and Mace 1902 より。以下、図版番号の付加されないものも同様)もある。

埋葬は、全体的に単葬で74%を占める。2人葬(図3-b143号墓)が7%、3人葬(図3-b132号墓)が3%を占め、残りは不明である。単葬が多く、一墓壙で家族墓的な性質が見られないのは、さきに述べた墓壙の類との関係が考えられる。すなわち、2a類や3類といった複雑な上部施設をもたない構造に由来する。そして、先に穿たれた墓壙は認識できなければならないが、同じ墓壙に遺体を追葬するという点には執着していないといえる。

次に、被葬者の性別は、男性が27%、女性が41%、性別不明の幼児が15%を占め、残る17%は性別・年齢ともに不明である。このことからエル=アムラ遺跡には、男性・女性ともに分け隔てなく埋葬されていたことになる。性別が不明なものが17%含まれることを考えると、両者はほぼ同じ割合となる可能性もあることになる。また、青年・幼児も同じ墓群に埋葬されることから、胎児のような存在は別としても、未成人(青年・幼児)と成人の間には、埋葬に関する極端な差別はないように思われる。

さらに、年齢比について言及しておきたい。性別と年齢の判明した被葬者の中で、男性被葬者のうち88%は成人、3%が青年、9%が幼児、女性被葬者については96%が成人、4%が青年であった。また、女性については幼児の埋葬例が不明である。

これらの比率から、成人に比べて男女とも、青年・幼児といった未成人の埋葬例が少ないということがいえよう。

ただし、未成人の埋葬の少なさは、死亡率の低さを直ちに示すものではないと考えられる。さきに、埋葬において未成人と成人の間に極端な差別はないことを述べたが、階層化社会の影響を受け、すべての青年と幼児が「平等に」葬られたとも断定しがたいのである。

さて、ここで最も問題となるのは、こうした墓壙の類型、被葬者の男女比や年齢差において、エル=アムラ遺跡出土の彩文土器はどのような出土傾向を示すかということである。以下では、このことについて詳細な検討を行いたい。

彩文土器の出土状況

1. 副葬数

まず、彩文土器が副葬される墓壙は、全体の墓壙数に対してどれだけの割合を占めるのかについて考えてみたい。

図4は、時期ごとの墓壙の総数に対して、白色交線土器もしくは彩文土器を副葬する墓壙数の割合を示したものである。時期区分は報告書に準拠した(以下同様。Randall-McIver and Mace 1902: 15-24)。

これらの墓壙数は、SD41期以前が21基、SD42~46期が16基、SD47~51期が8基、SD52~56期が15基

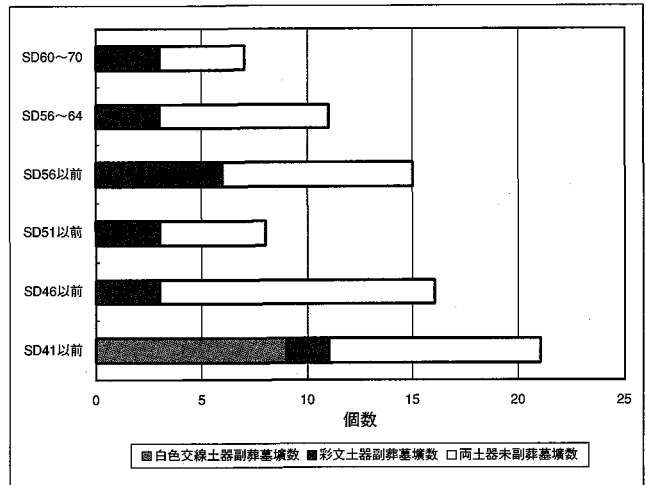


図4 エル=アムラ遺跡における時期別の施文土器副葬墓壙数

である。また、SD56~64期に該当するものが11基、SD40~64期に該当するが厳密に年代決定できないもの14基、SD60~70期が7基、時期決定に誤りがあるとされるもの16基である⁷⁾。

彩文土器が出土する墓壙数の墓壙総数に対する比率は、SD41期以前が10%程度、SD42~46期も19%程であることを除くと、SD47期以降は30~40%を占める⁸⁾。一方、試験的に分析を行ったナガ・エド=デル遺跡では、これよりも低く数%の比率を示し、とくにアルマント遺跡1400-1500墓群では、ナカダII b・c期が約6%、ナカダII d以降は3%前後を、彩文土器が占めている(Hendrix 1996: 40)。

彩文土器の副葬数の多さが、それらが奢侈品であったことを指し示しているかのように見える理由の一つである。またSD41期以前では、白色交線土器が彩文土器を凌駕し、墓壙総数においても43%とかなりの割合を占める点が注目される。先王朝期の土器変遷では、ナカダI期を特徴づけるのは白色交線土器で、ナカダII期を特徴づけるのは彩文土器という図式が一般的であるが、エル=アムラ遺跡の出土状態は、両施文土器に重複する期間があることを示している。これは、両施文土器の文様が相互に影響し合っていたことを傍証するものといえよう(Kantor 1953: 264)。

しかし、SD41期以前で、彩文土器が出土したa18号墓・a88号墓から白色交線土器が共伴することはなく、本質的には両者が相容れない性質であった可能性も高い。

2. 性別と年齢

次に、彩文土器が副葬された被葬者の年齢や性別と、彩文土器との関係について考えてみたい。図5は、彩文土器が副葬された被葬者の総数と性別、そして被葬者が成人か未成人かを示したものである。この図から得られた彩文

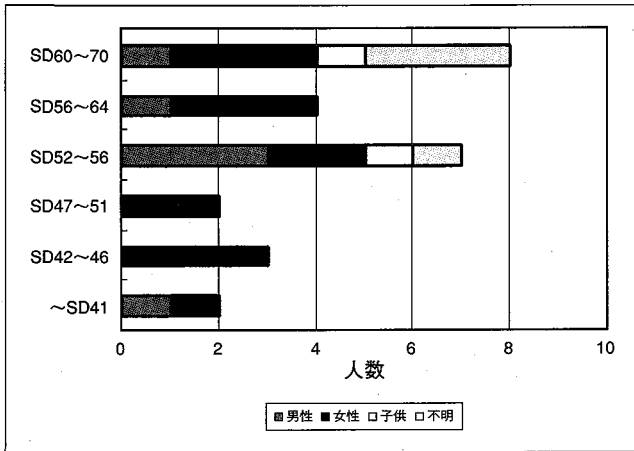


図5 エル＝アムラ遺跡における彩文土器副葬の被葬者性別割合

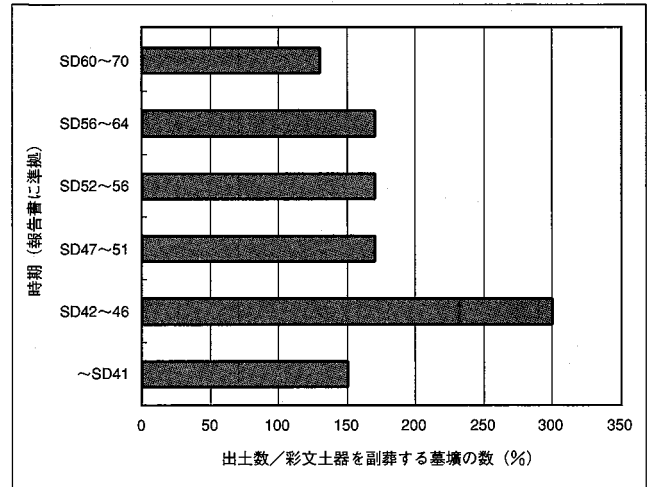


図6 エル＝アムラ遺跡彩文土器出土指数

土器の示す傾向は以下の3点である。

第1は、全時期を通じて女性の墓壇に彩文土器が埋葬される傾向があるという点である。白色交線土器の性別割合については図示しなかったが、SD41期以前に白色交線土器が副葬された9基のうち、男性被葬者は8基、女性被葬者は1基で圧倒的に男性被葬者の割合が高い。これに対し、彩文土器は男女比が同じである。さらに彩文土器は、SD42～51期では女性のみ副葬される傾向にある。男性の比率が最も増えるのはSD52～56期で、全体の43%を占めているが、以後、1点ずつの出土ではあるが、SD56～64期では25%、SD60～70期では13%と再び低率となる。このことから、彩文土器がやや女性に優位な器物にも関わらず、そういった価値観が経年変化したとも考えることができる。

第2は、全時期を通じて彩文土器が副葬される被葬者の性別と、単数葬なのか複数葬なのかといった被葬者数との間には相関関係は見られないという点があげられる。すなわち、彩文土器を副葬する女性遺体が必ず単数葬である、もしくは成人男性か青年・幼児とともに合葬される、といった規則性はみられないということである。

そして第3に、例は少ないがSD52～56期 (b151号墓) とSD60～70期 (a143号墓) では、未成年にも彩文土器を副葬している点があげられる (図5)。彩文土器が、成人に限定された器物ではなかったことを意味している。

3. 副葬量

さらに、彩文土器は一つの墓壇に何個体、副葬されるかについて考えてみたい。

図6は、彩文土器の出土指数を示したものである。

出土指数とは、彩文土器の出土総数を彩文土器が副葬された墓壇数で除した値のことである。この指数によって、被葬者1人につき何個の彩文土器が副葬可能であったかを

示し、その時期の彩文土器の隆盛をみようとするものである。つまり、単数葬の割合が多いエル＝アムラ遺跡において指数100は、1墓壇につき1個の土器が副葬されたことを示している。

この表で注目されるのは、SD42～46期の指数である。他の時期では大まかに指数150前後を示しており、1墓壇につき1個体から2個体を副葬するのが一般的であることを示している。ところが、SD42～46期ではこの指数が300を示しており、これは、各墓壇には3個体程度の彩文土器が副葬されていたことを示している。また、同時期の被葬者性別は、すべて女性である (図5)。

さきに述べた通り、SD42～46期を除けば、各墓壇には彩文土器が1～2個体副葬されるのが平均的であるが、彩文土器の副葬量が少なくても、石製品や金属製品が多く副葬される場合もある (b62号墓)。そして必ずしも、彩文土器の副葬量に比例して他の遺物副葬量が増加するとはいえない。このことから、彩文土器が多く副葬されたからといって、すぐさま裕福な者たちの埋葬施設であると結論づけるわけにはいかないことになる。

そして、各墓壇に1～2個体副葬されるのが平均的であることから、彩文土器本来の意味が「数多く副葬する」ことにあったというよりも、「副葬したこと」に価値がある器物であったともいえるだろう。

4. 埋葬位置

次に、墓壇内で彩文土器が埋葬される位置について考えてみたい。

先王朝期の埋葬は通常、バダリ期は頭を北に、そして顔を東に向けるのに対し (Adames 1988 : 19)、ナカダⅡ期では頭を南に⁹⁾、顔を西に向ける仰臥屈葬であるといわれている (Savage 2002b : 292)。エル＝アムラ遺跡でも基本的には、頭を南に顔を西へ向けて埋葬するとされている。

例外的に頭が北に向けられることもあるが、その場合でも、墓壙の軸はやはり南北線上にあるとされている (Randall-MacIver and Mace 1902 : 14)。

図3では、墓壙毎の方位が未報告のために、頭位は不明である。しかし、概して彩文土器を含めた副葬品が遺体の顔が向く方向に安置されているといえるだろう。そして、それらの副葬品は葬具や威信財といった特定の役割を持つものだけでなく、日用土器の類もふくまれる。

あらゆる種類の副葬品が「死者」の意識が向く方向、すなわち「死者」の顔が向く方向に置かれるということは、葬送儀礼の際に、葬者が権力やその継承を誇示することを目的として用意したものではなく、一辺倒な儀式にのっとった物品などでもない可能性を指摘できる。死んでなお、「死者」が必要とする物品という性格が強く感じられるのである。

一方、3類のようにニッチを設けてそこに副葬品を置くという形式をとる場合には、死者の意図というよりも、空間を無駄なく利用して物品を副葬しようという葬者(生者)の意識が強く働いているといえよう。

さて、問題の中心は彩文土器が副葬される位置であるが、図3-a139号墓や図3-a96号墓では、死者の顔が向く側に他の器物とともに置かれている。また、ニッチをもつ3類の墓壙である図3-a118号墓の例などでは遺体の顔が向く側ではなく、むしろニッチが設けられた側に他の類型に属する土器とともに並べられている。

こうした状況から、彩文土器は、他の副葬品と同様に遺体の顔が向く側に置く傾向が強いのといえるだろう。さらに、報告書では図面のみでの報告であるが、3類の墓壙形態をとるb45号墓では、ニッチのある側でなく遺体の顔が向く側に彩文土器を副葬している。このことから、同類の墓壙においても、顔の向く側におくことの重要性を認めていた可能性がある。

しかし、彩文土器の埋葬場所と被葬者の性別・年齢との相関関係は認められる可能性が低く、また、一墓壙内の被葬者数とも相関関係は認められないようである。

5. 共伴関係

エル=アムラ遺跡出土の彩文土器に伴って出土したのは、①他の類型¹⁰⁾に属する土器・土製品、②ビーズ¹¹⁾、③骨角器、④スレート製パレット、⑤石製品、⑥金属製品などである(表1では土器を類型ごとに記載。土製品は金属製品とともに記載)。

①他類型に属する土器には、赤色磨製土器 (Polished Red Pottery)、黒色口縁赤色土器 (Black-topped Red Pottery)、粗製土器 (Rough-faced Pottery)、波状把手付土器 (Wavy-handled Pottery)、後期土器 (Late Pottery)、変形土器 (Fancy forms) があるが (Randall-MacIver

and Mace 1902 : 15)、前述のとおり、彩文土器は白色交線赤色土器 (Cross-lined Red Pottery) とは共伴しない。このうち、全時期を通じて彩文土器と共伴するのは磨製土器・黒色口縁赤色土器・粗製土器で、波状把手付土器と変形土器が伴うのはSD52以降である。また、後期土器はSD60～70期で1例認められるが、SD40～64期の中では時期を特定できていないものが2例認められる(a76号墓・b225号墓)。しかし、いずれも特定の土器類型と彩文土器の間に共伴関係があるとは言い難く、既に奢侈品としての認識されている波状把手付土器 (高宮 2003a, 2003b) との相関関係が認められない点が特筆に値する。

土製品には動物形や家形のものがあるが、彩文土器との共伴関係が認められるのは、a4号墓で出土した家形土製品のみである。このことから、土製品と彩文土器の間にも密接な関係があるとは言い難い。

次に、②ビーズとの関係について考えてみたい。

ビーズには、土製・石製・金属製・陶器製のものがある。石製ビーズには、主として紅玉髓・ステアタイト・ガーネット・石灰岩・ラピスラズリがある。金属製にはa12号墓・a122号墓・図3-a96号墓出土などのような金製品があるが、厳密には陶胎に金箔を貼ったもので、純粋な金属製のビーズではない (Randall-MacIver and Mace 1902 : 49)。また、a12号墓・図3-a118号墓・図3-a139号墓などから出土した陶器製のものには緑釉が施されている。そしてこれらのビーズは、単一素材のみでネックレスやプレスレット、髪飾りが製作されるよりも複数の素材を混合する方が一般的である。とくにラピスラズリは、彩文土器とともに被葬者が女性の場合に副葬されるケースが多く、両者が何らかの相関関係にある可能性が考えられている¹²⁾。

しかし、女性被葬者の墓壙から多量に出土するのはラピスラズリ製のビーズだけではなく、他素材のビーズ等も存在することから、女性被葬者の墓壙には、これらのビーズを使用した装身具が副葬される傾向にあると考えることができる。

また、彩文土器が副葬される墓壙から、ネックレスやプレスレットだけでなく、頭部付近からもビーズが検出されることから (b119号墓・b17号墓)、髪飾り的な装身具も副葬されていた可能性が高い。装身具を構成していたビーズひとつひとつを取り上げるよりも、ネックレス・プレスレット・髪飾りが女性被葬者と関連すると捉え、これら装身具と彩文土器の共伴例の多さから、ビーズは彩文土器とも深い関係にあったと考えておきたい。

③骨角器には、象牙製スプーン (a88号墓・b62号墓)、象牙製ヘアピン (b62号墓)、象牙製呪符 (a139) があり、被葬者が女性の場合に副葬されている。被葬者が男性の場合は象牙製の釣竿 (a96号墓) が副葬され、幼児の埋葬に

表1 エル=アムラ遺跡出土彩文土器とその伴関係 (Randall-McIver and Mace 1902 より)。括弧内は出土点数

No.	遺物	性別	P 期	B 期	F 期	W 期	D 期	R 期	L 期	ビーズ	骨角器	ハレット	石製品	土製品・金銀製品・その他
~SD41														
a18	2a類	男性	53	11b, 78									石匠製容器H7	種が頭部付近に磨削
a68	2a類	幼児	41c, 93d	53b, 58a, 74b				23b, 34a, 81(3)					象牙製スプーン	土器埋納用ニッチあり
SD42~48														
a118	2a類	女性	40b	39b, 53a				7a, 9(96に文様付 マセが磨削状文), 68a					小型石灰岩製石製容器H37(高さ1.5in.)	土器埋納用ニッチあり・株状泥 製品(長さ4~5in.)・種子
a139	3類	女性	11b, 22	11f, 53b				7a(2), 41b					40粘板岩製(2)	銅製ビン・黒色土器(97aに類 似)
b37	3類	女性	11p, 16(2), 22, 57a, 53c					11, 23a, 42b, 69c, 80(2), 81(2)					43粘板岩製	木製支柱の痕跡あり
SD47~51														
a12	3類	幼児	4					17					40~56粘板岩製	
a122	3類	女性	22, 22b, 23a, 42, 57a	53a, 66a				17a(2), 67c					魚型粘板岩製	種子・種(中には孔雀石・松 脂・黒色鉱物一般鉱石?)
b119	3類	女性	14, 26a	53a				51					37~45粘板岩製	石製容器H27
SD52~58														
a96	2a類	男性	17, 47b(2), 93a, 93d	11a, 13a, 38c, 1				7b(座状文), 67c					42・79粘板岩製	プリント製魚尾形石器(5)・石灰岩製メース ヘッド・花崗岩メースヘッド・大理石製メース ヘッド・大理石製円形石器(7)・角礫岩製 斧・角礫岩製杖
b21	3類	女性	22	53a, 55~74a				47(文様は45), 65a						部分的に混乱
b35	3類	不明	22, 57a(2)	53a, 破片				破片, 67c					フリント製ナイフ・孔雀石	松脂・焼成の甘い血形土器 (5)
b107	2a類	男性	22, 23b, 40c	53b(2)				23b, 51, 59c, 74, 81(2), 91					粘板岩製(かなり磨 滅)	魚尾形石器・大理石(数点)
b151	2a類	女性/ 幼児						4c					44~45粘板岩製	玄武岩製石製容器
b166	2a類	男性	22a(2), 23b	37b, 42b, 53b				68c						小型瓶
SD60~70														
a126	3類	女性	40a, 94d					61						SD60に近い可能性あり・男性頭 蓋骨のみ残存
a143	3類	青年	22b, 40c(小型)	53b				3c, 69b						木製フェンス残存
b104	2a類	男性	11d					51b						
SD 56 ~ 64														
b17	2a類	男性/ 女性	22b(2), 23a					67c, 67c(小型)						
b62	2a類	女性	14, 22c, 23a, 40c, 41c, 62b	53b				50(文様は59b)						玄武岩製石製容器・石灰岩製・型取り容器(高 さ1in.)・底部フレスコスリ底付蓋・底部穴蓋 石製容器・小型石製容器破片H27・磨石 (2)・孔雀石
b154	2b類	不明	16, 40c, 41a, 93d, 11d(磨削層)	39a				4a(文様は41bで 座状文)						混乱された女性骨出土
SD40 ~ 64														
a3	2a類	女性	22b, 40c					67c						遺棄は黄色(黄色?)ざわいて いる
a4	不明	不明	40(破片)					67c(破片)						象牙製品・SD44~64
a6	2a類	不明						22(2), 40e						石製容器H27の土製模倣品
a76	3類	不明	鉢形(17b), 11b, 16, 22b, 40c	39c				38						
b40	3類	女性/ 青年	40a, 42	53a, 55a				17b, 67c						土器埋納用の磨あり
b46	2a類	男性	40a, 42	53b, 55a				61, 62(破片), 67c						松脂
b106	3類	幼児	22, 22c, 40c,					50b						SD46~63に該当。限りなくSD63 より新しい。
b225	3類	女性	22b, 40a, 95b					19(鉢形文), 41, 46(座状文)						

は骨製銚 (b106 号墓) が伴う。幼児の性別は不明であるが仮に男性であるなら、女性に装身具や身だしなみに必要な道具、男性に狩猟・漁撈用具という傾向が認められるといえよう。

エル＝アムラ遺跡では、女性被葬者や未成年被葬者に骨角器や貝製品が伴い、男性被葬者には小動物の頭蓋骨や他の部位の骨が伴う傾向にある。彩文土器とこれらの製品が伴うのは、主として a88 号墓・図 3-a96 号墓・b62 号墓で、これらの墓壙は調査者によって裕福な埋葬施設と考えられている (Randall-MacIver and Mace 1902: 36-39)。

しかし、彩文土器がそのような墓壙以外からも多数出土していることを考慮すると、両者が奢侈品として密接な関係にあると断言することはできない。むしろ、調査者のいう裕福な埋葬施設を中心に副葬される骨角器・貝製品・小動物 (頭蓋) 骨こそ、彩文土器より奢侈的な品物であるという印象を受ける。

④スレート製パレット (以下パレット) は、顔料であるマラカイトや磨石が伴う¹³⁾。彩文土器は伴わないが、パレット自体に擦痕が認められる例もある (b87 号墓・b189 号墓)。このことから、パレットを副葬品とすること自体が、富や権力の象徴であったとしても実用性は失われていないことになり、死後の世界においても「磨り潰した」顔料の必要性を感じていたことになる。

また、彩文土器に伴うか否かに関係なく、パレットを副葬する被葬者の大半は女性である。そして、SD56 以前の彩文土器が副葬される墓壙からは、分類番号に関係なくパレットが出土している。これらの墓壙の被葬者も女性であり、被葬者が男性でありながらパレットを副葬するのは図 3-b96 号墓・b107 号墓・b46 号墓のみである。

以上のような点から、パレットと彩文土器が共伴関係にあることと、その墓壙の被葬者が女性であることに関連性があると考えられる。

⑤石製品には、狭義の石器・石製メイスヘッド・石製容器・磨石・円盤形石製品がある。

石器には、フリント製の魚尾形石器¹⁴⁾ やナイフ形石器がある。魚尾形石器やナイフ形石器が出土したのは SD64 期までで、副葬される被葬者の大半は男性である。また、これらの石器が彩文土器に伴う例は少ない (a96 号墓・b35 号墓・b107 号墓・b46 号墓)。そして、b35 号墓が被葬者の性別・年齢が不明であることを除くと、彩文土器と石器が共伴する墓壙の被葬者はすべて男性である。石製メイスヘッドも男性被葬者の墓壙からのみ出土しており、彩文土器がこれに伴う例は 1 例しか認められない (a96 号墓)。

ビーズやパレットが伴う彩文土器は女性被葬者の墓壙に埋葬されることを考慮すると、被葬者が男性の場合には石

器との関連性がみられると考えられる。

一方、石製容器は彩文土器が伴うか否かに関係なく、かつ年齢・性別にも関係なく副葬される傾向にある。

彩文土器が比較的、女性に優位に副葬されることから、石製容器と彩文土器が共伴関係にある墓壙の被葬者は女性ということになる (a118 号墓・b119 号墓・b151 号墓・b62 号墓・b225 号墓)。しかし、石製容器は彩文土器が副葬されない墓壙において、あくまで被葬者の性別に関係なく副葬されることから、彩文土器と石製容器との関連性は、思いのほか薄い可能性がある。これはこれまで、彩文土器の胴部に描かれる抽象的な文様が、石目の模倣 (Payne 1993) であると考えられているために興味深いといえよう。器形が類似することあっても、石製容器が奢侈品で、抽象文を持つ土器が模倣品で廉価品という図式に依拠したことからこのように考えられてきた。しかし、石製容器と彩文土器の関係が仮に希薄だとすると、両容器が別々の価値基準に基づいて副葬されていることになり、従来の文様解釈にも影響を与えることになるだろう。

⑥金属製品には、金・銀・銅・鉄製品が考えられる。

このうち彩文土器と共伴するのは銅製ピン (a139 号墓)、銅製アンクレットと銅製プレスレット (b62 号墓) である。他には、銅製の指輪・スプーンなどが出土しているが、彩文土器には伴わない。次に金製品が多いといえるが、エル＝アムラ遺跡で確認できるのは、陶胎に金箔を施したビーズである。銀製品については、鉢形製品が銅製スプーンに伴って出土している (b233 号墓) が、彩文土器とは共伴しない。また、エル＝ゲルゼ遺跡では 67 号墓で隕鉄製ビーズと彩文土器が共伴しているが、エル＝アムラ遺跡ではこのような共伴関係は認められていない¹⁵⁾。

以上のような出土傾向から、銀製品と (隕) 鉄製品は多用されていないといえよう。鉄製品は、そもそも「金属」としてすら認められていない可能性があり、彩文土器との関係も薄いと考えられる。金製品についても、装飾品の一部に用いられるビーズとの関係は認められるが、金属製品としての印象は薄いといえよう。したがって、金属全般と彩文土器との間に強固な関係はないと考えられる。

6. 文様と出土状況

彩文土器をとりまく環境と出土状況について、1～5 まで考察してきたが、最も重要なのはこれらの属性と文様との関係である。

筆者はさきに、船形文や有花・無花植物文のような具象的な文様とともに、渦巻状文・鱗状文・斑状文・水玉状文のような抽象的な文様も描かれるとした。とくに、抽象的な文様は、口縁部・把手・底部のような細部にまで施され、一方で、船形文のような具象文とともに描かれることについても指摘した (関廣 2001, 2003)。

図7は、エル＝アムラ遺跡で出土した彩文土器を器形ごとに並べたものである。また、同分類番号で、かつ異なる墓壙から複数個体出土しているものについては、最古年代を掲載した。

さて、報告書に記載されている土器表記番号よりエル＝アムラ遺跡では、主に倒卵形土器と扁球形土器から構成されていることがわかる¹⁶⁾。さらに、具象文が描かれる彩文土器には、植物文よりも船形文が(図7-13～16,18)、抽象文が描かれるものには、波状文が施文される傾向にある(図7-5～8,10～12)。

そして、既にその概略を指摘したように、出土した倒卵形彩文土器に描かれる文様間には優劣があると考えられる(関廣 2001)。まず、把手が両方とも見ることのできる面をA面とし、片方しか見ることのできない面をB面とする。エル＝アムラ遺跡出土の彩文土器では、A面に船形文が描かれる場合、有花植物文とマスト状文がB面に描かれる。この場合、船形文(優勢) > 有花植物文、または船形文 > マスト状文となる。しかし、他遺跡ではA面に有花植物文が描かれる例が存在するのに対し、エル＝アムラ遺跡ではこのタイプの彩文土器が報告されていないため、有花植物文とマスト状文の関係は不明瞭である。

また、A面に船形文が中心的に描かれる彩文土器は、b104号墓の被葬者が男性である以外、すべて女性の埋葬施設から出土しており、彩文土器の文様によっても性差がある可能性を暗示している。

次に、石製容器の材質転換形態とされてきた、抽象文のみが描かれる彩文土器と石製容器が共伴している点についても考えてみたい(a118号墓・b151号墓・a46号墓)。

仮に、これらの彩文土器が材質転換形態とすれば、石製容器を模倣した彩文土器と石製容器が共伴する必要性はない。また、その彩文土器と他の奢侈品とが共伴する可能性は低くなるのではないだろうか。ところがエル＝アムラ遺跡では、彩文土器に共伴する石製容器が存在し、廉価版模倣品であるはず彩文土器が他の奢侈的な副葬品に伴うのである。

このように、「石製容器を模倣した」とされる彩文土器と石製容器の間に、模倣される対象と模倣したものという明確なルールが見られない。この点は、抽象文のうち、石材の節理を表現しているとされる渦巻文が、船形文や植物文といった具象文が描かれる土器の底部に施され、それらでさえ石材の節理と考えなければならないのかといったことと、同じ矛盾といえるだろう。

石製容器の材質転換形態と考えられる彩文土器はナカダⅡ期全体を通して長期間存在することから、石製容器の模倣から具象的な文様を持つ彩文土器という流れにはなりにくい。このことから、彩文土器への施文が石製容器と一連

の流れにあるというよりも、別のシステムに基づいた行為である可能性が高いといえる。

7. 内包物の有無

最後に彩文土器とその内包物について考えてみたい。

エル＝アムラ遺跡において、彩文土器に内包物は認められなかった¹⁷⁾。このことから、土器の内包物よりも土器そのものに価値があった可能性がある。

彩文土器の内包物が液体であれば、出土状況だけで内包物があったか否かを判別することは確かに難しい(高宮 2003a)。器は物を入れるのが本分ではあるが、一方で、他に装飾される土器がほとんど認められず、当時の技術水準を考えると、土器や彩文自体に相応の意味や価値が与えられていた可能性も捨てきれないといえよう。

まとめ

以上、煩雑になることを恐れず、彩文土器と関連するすべての属性を対象とし、エル＝アムラ遺跡出土彩文土器の出土傾向について検討した¹⁸⁾。その結果、1から7のような様相を呈した。

第1に、エル＝アムラ遺跡における彩文土器の副葬割合が多いことを指摘した。この結果は、これまで彩文土器が奢侈品とされてきた根拠の一つといえる。すなわち、従来から奢侈品とされてきた金製品・ラピスラズリ、またはメイスヘッドのような権威を裏付けるような資料が他の墓群に比べ、集中的に出土していることから、エル＝アムラ遺跡の報告にある墓群は階級、または階層の高い集団である可能性が極めて高い。したがって、そのような墓群から出土した彩文土器もまた当然のように奢侈品と想定されよう。

ところが、図3の96号墓のように交易や政治的背景を持つ物品が一遺構にまとまって出土し、それに彩文土器が伴う場合と、伴わない場合がある。彩文土器が必ずしも、階層・階級の高い埋葬に伴わないという点が重要である。そしてそれゆえに、エル＝アムラ遺跡で彩文土器の副葬率が高いという現象と、報告された墓群の階層・階級が高いことと、彩文土器が奢侈品であるという3点は一直線状に並んではない。

次に、彩文土器が女性被葬者に副葬される頻度が高いことも述べた。そして、この女性被葬者が単葬・2人葬・3人葬であるのかという点では、相関関係を認めることはできなかった。また、彩文土器が副葬される被葬者に女性が多いからといって、男性被葬者の墓壙に彩文土器が全く副葬されなかったというわけではない点も特筆に値する。

これは、エル＝アムラ遺跡の彩文土器に対する価値観が、男女・成人か未成人かに関わらず普遍的でありながら、成人女性に優位であったということを物語るからである。

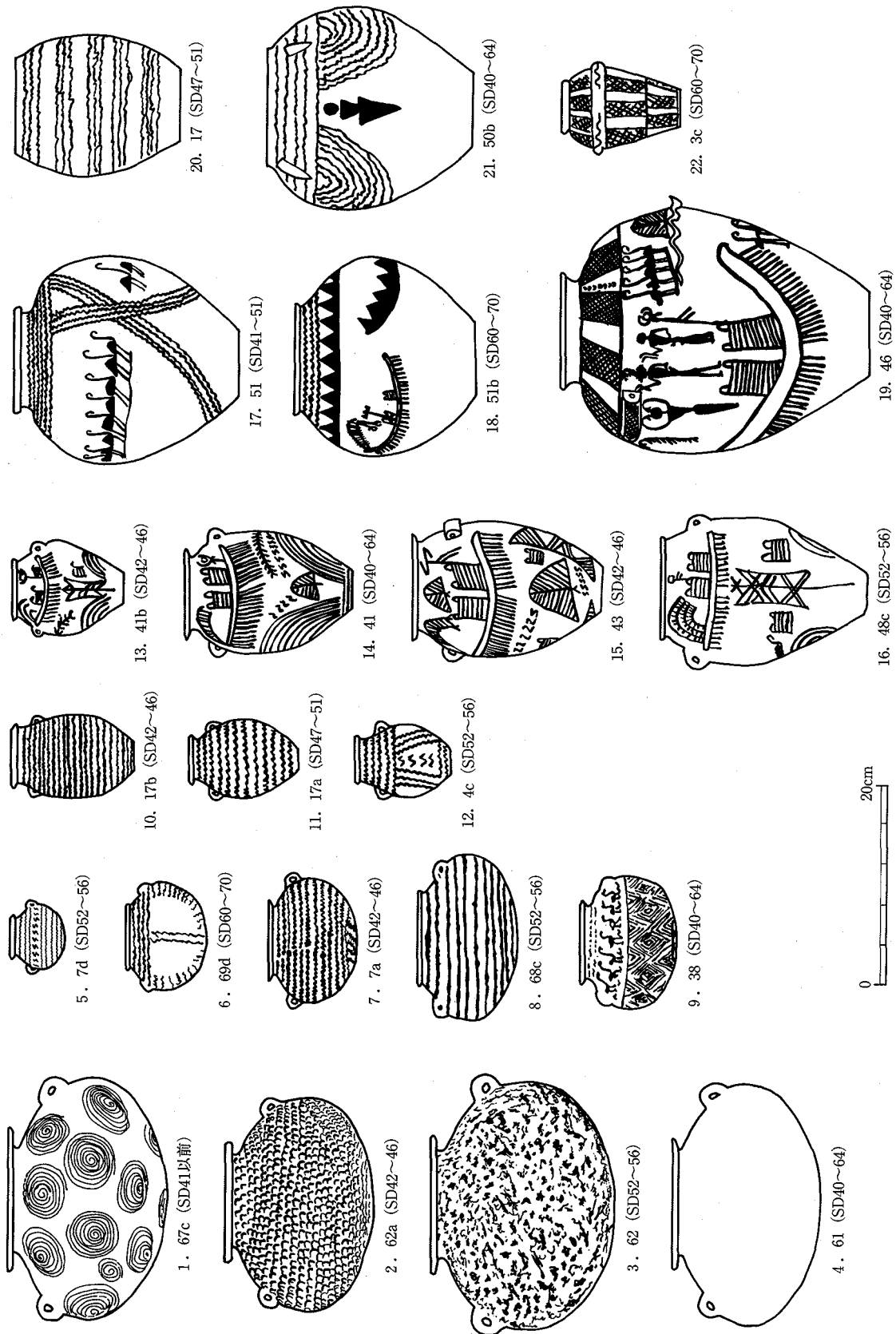


図7 エル=アムラ遺跡出土彩文土器 (分類番号はPetrie 1901。年代は報告書に準拠)

さらに第3には、一墓墳に対する彩文土器の副葬量について検討した。この結果エル=アムラ遺跡では、彩文土器は特定の時期をのぞいて1~2個体を副葬すれば、事足りる物品と考えられていたことが判明した。土器の個体数は彩文土器を副葬する際に重要な要素ではなく、むしろその土器が副葬されることに意味があったことを暗示しているといえよう。

第4には、一墓墳につき1~2個体副葬される彩文土器が、どの位置に埋納されるのかという点を検討した。これにより、副葬品は死者の顔が向く側に置かれる傾向にあり、彩文土器も例外ではなかった。つまり、被葬者にとって死後も、この彩文土器が身近にある必要性があったと考えられた。そして、死者の顔が向く側とは、暗に西側を意味していることも特筆に価しよう。

そして、第5にはエル=アムラ遺跡の彩文土器と他の類型に属する土器や土製品・ビーズ・骨角器・スレート製パレット・石製品・金属製品との関係について検討した。この結果、エル=アムラ遺跡における彩文土器をめぐって、以下のような相互関係を想定できる。

すなわち、<>が相互関係をもつ可能性があり、><は相互に希薄な関係である可能性があるとする、

他の類型に属する土器・土製品 >< 彩文土器
 ビーズ (素材関係なし) <> 彩文土器
 骨角器 >< 彩文土器
 スレート製パレット <> 彩文土器
 石器 (男性被葬者限定?) >< 彩文土器
 石製容器 >< 彩文土器 (抽象文?)
 金属製品 >< 彩文土器

のような関係が成り立つと考えられる。

先にも述べたが、石製品や金属製品といった明らかに奢侈品であると考えられる物品と密接な関係を示さず、他の類型に属する土器との関連性もそれほど強いとは見受けられない。

さらに、彩文土器とのつながりを感じさせるスレート製パレットやビーズも、被葬者が女性であるという共通点だけで、それらと共伴することやその副葬量に影響を受けているとは考えがたいのである。

第6に、エル=アムラ遺跡出土の彩文土器の文様について検討した。この結果、具象的な文様に関しては、植物文よりも船形文が中心で、これらの文様が施された土器は女性被葬者の墓墳に副葬されていた。また、石製容器の材質転換形態とされてきた抽象文が施された土器と、石製容器は共伴関係にあることが判明した。これは一律に、儀礼的表現あるいはナイル川周辺の風景と評されてきた彩文に、

思いのほか深遠な意味がある可能性を示唆しているといえよう。

最後に、彩文土器には、ほとんど内包物が認められない点を指摘した。残存しにくい内容物である可能性もあるが、多様な表象手段をもたない先王朝期のエジプトにおいて、彩文土器の価値が文様自体にもある可能性は極めて高いと考えられる。

以上の7つの側面について検討してきた。結果として、エル=アムラ遺跡出土の彩文土器は従来から奢侈品とされている物品に必ずしも伴わず、成人女性に優位に副葬されながら、一墓墳に対して数量を期待されていない副葬品といえるだろう。

そして、権力や財力を示す遺物と必ずしも強い相関関係を示さないことによって、彩文土器の性格はいっそう謎めくばかりである。これまで、このような権力や財力を示す遺物-奢侈的副葬品の検討により、身分秩序との関連性が考えられてきた。また、一般的には特定の遺物が出土することによって特定職種との関連性が考えられてきた。

先王朝期エジプトの社会を構成していたはずの様々な階級・階層と職業。エル=アムラ遺跡はアビドス地域内の一墓地遺跡に過ぎないが、彩文土器の出土状況は複雑な様相を呈している。それゆえ、彩文土器出土の有無と階級・階層を結びつけ、先王朝期の社会構成を論じるにあまりあるといえる。

さらに、エル=アムラ遺跡において彩文土器の出土傾向が女性に優位であったことから、女性の役割が複雑で、地位も高かったことも示すと考えられよう。一方で、男性にも彩文土器が副葬されるという点は、彩文土器が必ずしも女性に限定された副葬原理上で動いたものではなかったことを示唆している。そして、成人と未成人の場合も同様である。

一つの社会の中には当然のことながら、サブシステムとしていくつもの小領域が存在する。これらは、当時の人間が何をどのように認識/認知して生活していたかを表すもので、地域によって、時代によって、この小領域の数は無限に変化するといえるだろう。先王朝期のエジプトも例外ではなく、宗教・交易・経済・政治などの領域が想定される。そして、奢侈品として認定されてきた物品はこの領域をそれぞれ反映するものであった。

この領域化の中で彩文土器も宗教的・象徴的奢侈品とされてきたが、エル=アムラ遺跡の検討では、その出土傾向の中に単なる奢侈品としての位置づけを危ぶまなければならない点が見受けられた。これは直ちにそれを背景とする領域が、これまで想定されていたものとは異なることが考えられる。そして、彩文土器の存在を考慮しなくても、階級・階層の上下を判別できることから、その領域が、経済

や政治といったマクロな領域ではない可能性も想起されるのである。

これは、彩文土器が宗教的・象徴的なものか否か、宗教的・象徴的であるとすればどの程度、記号化されたものであるのかという点を検討するにあたって重要であるといえよう。繰り返しになるが、やはり彩文土器は単なる奢侈品と評価されるべきではなく、従来から奢侈品として認識されている石製品や金属製品とともに、複雑な出土状況を示すことに意味があると考えるべきではないか。

本稿ではナガ・エド=デル遺跡での予察を参考に、エル=アムラ遺跡に限って論じてきた。しかし、一遺跡のみでは先王朝期エジプトの彩文土器に対する認知システムは復元できない。したがって今後、同遺跡の分析結果をもとに他遺跡においても考察を深め、体系的な理解を呈示したいと考えている。

末文になりましたが、本稿作成にあたり、古瀬清秀教授の指導と高宮いづみ氏、小泉龍人氏のアドバイスがなければ完成しなかったことを記して、感謝します。

註

- 1) 前稿では、ナカダⅡ期の彩文土器に描かれる文様を象徴的なものとし、また、土器そのものを奢侈品と断定する前に、踏むべき手続きがあることを述べた。また、彩文土器の概要や関係用語などもすべて前稿の通りである(関廣 2003)。
- 2) いわゆる、ピートリーの分類の White Cross-lined Ware である(Petrie 1901:13-17)。後述する白色交線赤色土器と同じである。この土器にはヘマタイトによるウォッシュがけの上に白色の彩文が施される(Kantor 1953:76)。この点で、一般的な名称からいえば彩文土器には変わりがないが、慣例に倣うことにした。なお、この分類名の矛盾はすでに指摘されており(Peet 1933)、いわゆる彩文土器のなかに刻文も含まれ、筆書きの絵画と刻画を同じ分類に入れることに対する批判は、フリードマン(Friedman 1994)が行っている。
- 3) 昨今、セトルメントパターン研究も進み(Patch 1991、高宮:2000b)上エジプトのナイル河流域に小文化圏が複数存在していたことが判明しつつある。この文化圏は一遺跡のみならず、拠点集落と衛星集落の複数で構成され、アビドス地域のように王朝時代のノモスの役割と大きく関係する。この文化圏どうしの関係は様々な属性から復元可能と考えられるが、彩文土器も例外ではない。
- 4) ワニヤカバがよく描かれる。これらの動物は自然界の瘴猛な一面を象徴しており、これを捕らえる描写は自然の力を制御することを意味していると考えられる(図1-6,7)。フィンケンスタデトによると、アビドス遺跡出土資料よりも、エル=マハスナ遺跡やアラワナ遺跡から出土した白色交線土器の方が精製品であるとする(Finkenstaedt 1980)。ナガ・エド=デル遺跡北部に位置するメサイド遺跡から出土した白色交線土器の文様をメサイド様式としているが、動物の胴体に線描きの山形文を施すという点で、アラワナ遺跡との類似性が認識されている(図1-5)。
- 5) アビドス地域とは異なり、羊・ガゼル・ヤギといった家畜がよ

- く描かれる(図1-1,3,4)。幾何学文や抽象文が明瞭に描かれる(図1-2)のも特徴的である(Finkenstaedt 1981)。シャーフ Scharff は、ナカダ地域から出土する白色交線土器の白色顔料が純白であると述べているが(Scharff 1928:266)、フィンケンスタデトは必ずしも純白ではないことを指摘している(Finkenstaedt 1980:116)。基本的に、アビドス様式よりも施文方法が丁寧であり仕上がりも美しいとされる。また、ワニヤカバのような野生動物より家畜を強調するのは、ナカダ社会に農耕文化が根付いていたことを示すという。
- 6) 少量の日用土器やパレットが副葬されているだけの墓塚は、報告書紙面上の都合で割愛されている。
- 7) 時期の区分は、報告書の記述に従った。現在はカイザー編年の名称を用いることが多い(Hendrix 1996:38; Kantor 1992:7)。単純にSD法をカイザー編年に置き換えるのは困難であるが、概してナカダⅠ期はSD30-38、ナカダⅡa・b期はSD38/40-45、ナカダⅡc・d期はSD40/45-63と考えられている(Bard 1994:269; 張替 1985:59)。これに従えば、SD41以前はほぼナカダⅠ期に該当し、SD42-46はナカダⅡa・b期、SD47-51はⅡc期、SD52-56はⅡd1期、SD56-64はⅡd2期に該当する。また、時期決定があいまいなものについてはグラフから削除した。
- 8) 本文にもあるように隣接するナガ・エド=デル遺跡では、全体数に対して数パーセントの副葬率である。この点では、エル=アムラ遺跡の副葬率は特異な例といえるだろう。しかし、本稿ではこれを踏まえたうえで、一墓塚に埋葬される量や共存関係について検討したい。
- 9) 頭位は、必ずしも南ではない場合がある。ナガ・エド=デル遺跡N-7308x号墓とN-7335号墓の被葬者は、頭位が北であるにもかかわらず、顔は西を向いている(Lythgoe 1965:184-186,201)。この点で、やはり西側に対する強い意識も感じられる。
- 10) classを「類」とした。ただし、ピートリーの土器分類には多様な器形も含まれることから、これを類型とした。
- 11) 大半の資料は素材で分類したが、ネックレスやプレスレットはそれを構成するビーズの素材が複数組み合わせる場合がほとんどである。本稿では、製品として機能したことを重視した。
- 12) 高宮いづみは、ラピスラズリが女性の副葬品として多く用いられるというW.グリスワルド(Griswold)の説に賛同しているが(高宮 2000a:30)、同時に、ラピスラズリと共存する確率の高い彩文土器との関係は不明であるとしている(高宮 2000a:33)。本稿ではエル=アムラ遺跡内の墳墓群の分析にとどまったが、ラピスラズリと彩文土器が共存する確率は高いといえる。一方、試験的に分析を行ったナガ・エド=デル遺跡では、それほど強い相互関係があるとはいえない。このことは、地域性によるものか、階級・階層が関係するものなのかは明言できない。もう一つの可能性としては、彩文土器が、交易のようなマクロな領域とは別のシステムに基づいたものであることが考えられる。つまり、物資を集積することで得られる利潤以外の価値基準が存在する可能性である。
- 13) エル=アムラ遺跡a122号墓では、籠のなかにマラカイト・鉄鉱石・松脂が納められた状態で出土した。パレットだけでなく、顔料自体も実用が想定される状態で出土することから、単純に奢侈品として存在したのではないことが分かる。
- 14) この石器は、王朝期のミイラ完成後に執り行われた口開けの儀式との関連性が考えられている(Savage 2002a:84; Van Walsem 1978-1979:196-197)。また、破碎された状態で出土することから(Savage 2002a:85)、この石器が、死後において、実用性を喪失させたものであることを意味している。
- 15) 管見の限り、銀製品には彩文土器が伴わない。この点について

は他地域での詳細な分析が必要だが、少なくともナガ・エド＝デル遺跡・ナカダ遺跡(1257号墓)といった大規模な遺跡からは、銀製品と彩文土器の共存関係は認められていない。また、隕鉄製ピアズが出土したエル＝ゲルゼ遺跡では、67号墓において彩文土器と共存するのに対し、133号墓では共存しない(Petrie et al. 1912)。

- 16) 図7は彩文土器の出土様相を提示したもので、筆者の年代観をしめたものではないことを明記しておきたい。また、器形と文様の形式番号が異なるものや、形式番号が表記されていても図面の無いものは削除した。器形の名称や各文様の名称については関廣 2003を参照。
- 17) ナガ・エド＝デル遺跡 N-7415号墓には、「褐色の堆積物」とある(Lythgoe 1965:249)。植物質か動物質かは不明であるが、彩文土器に内容物の痕跡が認められている。ナガ・エド＝デル遺跡で植物質(穀物を含む)の内容物が認められるのは、黒色口縁赤色土器・赤色磨製土器・波状把手付土器であり、N-7402号墓では油質の内容物が確認されている。
- 18) エル＝アムラ遺跡に限ったことではないが、調査以前に攪乱・盗掘を受けている可能性も十分にあり、これを考慮しなければならない。今後、他遺跡での分析結果を元に、攪乱・盗掘によって引き起こされたデータ等を修正していく必要があることを明記しておく。ただし、筆者は一遺跡の報告例でどれほどの出土傾向を示すのかという点も重要であると考えている。

参考文献

- Adames, B. 1988 *Predynastic Egypt*. Aylesbury, Shire Publications LTD.
- Ayrton, E. R. and W. L. S. Loat 1911 *Pre-dynastic Cemetery at el-Mahasna*. London, B.Quaritch.
- Avdief, V. I. 1935 Geometrical Ornament on Archaic Egyptian Pottery. *Ancient Egypt* 1935: 37-48.
- Baines, J. 1989 Communication and Display: The Integration of Early Egyptian Art and Writing. *Antiquity* 63: 471-482.
- Bard, K. A. 1994 The Egyptian Predynastic: A Review of the Evidence. *Journal of Field Archaeology* 21: 265-288.
- Bard, K. A. 1999 *Encyclopedia of the Archaeology of Ancient Egypt*. London and New York, Routledge.
- Baumgartel, E. J. 1970 *Petrie's Naqada Excavation: A Supplement*. London, B.Quaritch.
- Bourriau, J. 1981 *Umm el-Ga'ab. Pottery from the Nile Valley before the Arab Conquest*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Cialowicz, K. M. 1985 Predynastic Graves with Weapons Found in Egypt and Nubia (analysis of published material). *Fontes Archaeologici Posnanienses* 34: 157-180.
- Cleyet-Merle, J.-J. et F. Vallet 1982 Egypte. In F. Beck et al., *Archéologie comparée: Afrique-Europe occidentale et centrale/l'ouvrage collectif établi par la conservation du Musée des antiquités nationales*, 68-165. Catalogue sommaire illustre des collections du musée des antiquités nationales de Saint-Germain-en Laye 1. Paris, Reunion des musées nationaux.
- De Cénival, J. L. 1973 *L'Egypte avant les pyramides: 4e millénaire. Exposition Grand Palais, 29mai-3sep.1973*. Paris, Le Plessis-Robinson.
- Finkenstaedt, E. 1980 Regional Painting Style in Prehistoric Egypt. *Zeitschrift für ägyptische Sprache und Altertumskunde* 107: 116-120.
- Finkenstaedt, E. 1981 The Location of Styles in Painting: White Cross-Lined Ware at Naqada. *Journal of American Research Center in Egypt* 18: 7-10.
- Friedman, R. F. 1994 *Predynastic Settlement Ceramics of Upper Egypt: A Comparative Study of the Ceramics of Hemamieh Naqada and Hierakonpolis*. Ph.D. dissertation. Department of Near Eastern Studies, University of California, Berkeley.
- Garstung, J. 1903 *Mahāsna and Bêt Khallâf*. London, B.Quaritch.
- Griswold, W. 1992 Measuring Social Inequality at Armant. In R. Friedman and B. Adams (eds.), *The Followers of Horus: Studies Dedicated to Michael Allan Hoffman*, 193-198. Egyptian Studies Association Publication No.2. Oxford, Oxbow.
- Hall, H. R. 1931 Objects from Mr. Brunton's Excavations. *British Museum Quarterly* 5: 17-18.
- Hendrix, S. 1996 The Relative Chronology of the Naqada Culture: Problems and Possibilities. In J. Spencer (ed.), *Aspects of Early Egypt*, 36-69. London, British Museum Press.
- Hoffman, M. A. 1991 *Egypt before the Pharaohs. The Prehistoric Foundations of Egyptian Civilization*. Austin, University of Texas Press.
- Kantor, H. J. 1953 Prehistoric Egyptian Pottery in the Art Museum. *Record of the Art Museum Princeton University*, 67-83.
- Kantor, H. J. 1992 The Relative Chronology of Egypt and Its Foreign Correlations before the First Intermediate Period. In Ehrlich, R. (ed.), *Chronologies in Old World Archaeology*, 3-43. Chicago, University of Chicago Press.
- Lucas, A. 1934 *Ancient Egyptian Materials & Industries*. London, Edward Arnold.
- Lythgoe, A. M. 1965 *The Predynastic Cemetery N 7000. Naga-ed-Der, Part IV*. Berkeley, University of California Press.
- Patch, D. C. 1991 *The Origin and Early Development of Urbanism in Ancient Egypt: A Regional Study*. Ph.D.dissertation, University of Pennsylvania.
- Payne, J. C. 1968 Lapis Lazuli in Early Egypt. *Iraq* 30: 58-61.
- Payne, J. C. 1990 The Chronology of Predynastic Egyptian Decorated Ware. *Erets - Israel* 21: 77-82.
- Payne, J. C. 1992 Predynastic Chronology at Naqada. In R. Friedman and B. Adams (eds.) *The Followers Horus: Studies Dedicated to Michael Allan Hoffman*, 185-192. Egyptian Studies Association Publication No.2. Oxford, Oxbow.
- Payne, J. C. 1993 *Catalogue of the Predynastic Egyptian Collection in the Ashmolean Museum*. Oxford, Clarendon Press.
- Peet, T. E. 1933 The Classification of Egyptian Pottery. *Journal of Egyptian Archaeology* 19: 62-64.
- Petrie, W. M. F. and J. E. Quibell 1896 *Naqada and Ballas*. London, B.Quaritch.
- Petrie, W. M. F. 1901 *Diospolis Parva*. London, B.Quaritch.
- Petrie, W. M. F., G. A. Wainwright and E. Mackay 1912 *The Labyrinth Gerzeh and Mazghuneh*. London, B. Quaritch.
- Petrie, W. M. F. 1920 *Prehistoric Egypt*. London, B. Quaritch.
- Petrie, W. M. F. 1921 *Corpus of Prehistoric Pottery and Palettes*. London, B. Quaritch.
- Randall-McIver, D. and J. C. Mace 1902 *El Amrah and Abydos, 1899-1901*. London, B. Quaritch.
- Roth, A. M. 1992 The psš-kf and the 'Opening of the Mouth' Ceremony: A Ritual of Birth and Rebirth. *The Journal of Egyptian Archaeology* 78: 113-147.
- Savage, S. H. 2002a The Status of Women in Predynastic Egypt as Revealed through Mortuary Analysis. In A. Rautman (ed.), *Reading the Body: Representations and Remains in the Archaeological Record*, 77-92. Philadelphia, University of Pennsylvania Press.

- Savage, S. H. 2002b Upper Egyptian Predynastic. In P. N. Preregrine and M. Ember (ed.) *Encyclopedia of Prehistory, Volume 1: Africa*, 287-312. New York, Kluwer Academic.
- Scharff, A. 1928 Some Prehistoric Vases in the British Museum and Remarks on Egyptian Prehistory. *The Journal of Egyptian Archaeology* 14: 261-276.
- Scott, G. D. 1986 Prehistoric, Predynastic and Early Dynastic Egypt. *Ancient Egyptian Art at Yale, 20-41*. New Haven.
- Van Walsem, R. 1978-1979 The psš-kf: An Investigation of an Ancient Egyptian Funerary Instrument. *Oudheidkundige Mededelingen uit het Rijksmuseum van Oudheden te Leiden* 59/60: 193-249.
- 関廣尚世 2001 「エジプトナカダⅡ期の認知的側面について」『奈良大学大学院研究年報』第6号 251-254頁。
- 関廣尚世 2003 「彩文土器に描かれた文様－エジプト先王朝期の「表現」について－」『西アジア考古学』第4号 67-75頁。
- 高宮いづみ 2000a 「前4千年紀ナイル河下流域におけるラピスラズリ交易について」『西アジア考古学』第2号 21-37頁。
- 高宮いづみ 2000b 「ナカダ文化のセツルメント・パターンについて－エジプト中部バダリ地区における墓地形成パターンからの考察－」『オリエント』第43巻1号 1-18頁。
- 高宮いづみ 2003a 「エジプト・ナカダ文化の「赤色彩文土器」について－埋葬のコンテクストからの理解－」『新世紀の考古学－大塚初重先生喜寿記念論文集－』1055-1070頁。
- 高宮いづみ 2003b 「ステイタスシンボルから見た王権の成立」初期王朝研究委員会編『古代王権の誕生－ユーラシア・西アジア・北アフリカ編－』245-258頁 角川書店。
- 張替いづみ 1985 「エジプト先王朝期ナカダ文化の編年に関する一考察」『文学研究科紀要 別冊第十二集』哲学・史学編 53-66頁 早稲田大学大学院文学研究科。
- 張替いづみ 1990 「エジプト・ナカダ文化期の牙形製品について」『古代』第90号 1-20頁。
- 張替いづみ 1991 「エジプト・ナカダ文化における象牙製品について」滝口宏編『古代探叢』635-650頁 早稲田大学出版部。

関廣尚世

広島大学大学院文学研究科

Naoyo SEKIHIRO

Hiroshima University